

回れ右で先頭に・ 安田幸一

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■すり鉢に込めた建築以上

箱根へ行ったら必ず寄りたいのが、ポーラ美術館。訪ねるために箱根へ脚が向くというファンも、私だけではないでしょう。日建設計時代にこの建物を担当したのが建築家・安田幸一さん。「擁壁を兼ねた基礎が設計の根幹である」と説明してくださる。すり鉢状の擁壁の周辺には、常に大きな水圧がかかっている。圧縮に強いのが筒状のコンクリート。だから、「このすり鉢は何世紀ももちます、遺跡のようにね」と微笑む。

その温和な風貌の中の、瞳の奥の鋭さを、見逃せない。現場では、竹中工務店の名物所長と随分と派手に議論したと思い出を語る。現場一筋の「ザ・監督」と、納まりに妥協を許さない建築家との、魂の闘いの様子が大いに想像できるのです。

林昌二先生に、ポーラのオーナー（故鈴木常司氏）が本社ビルの設計を、特命依頼したのは、パレスサイドビル竣工の新聞公告を見てのことらしい。その後30棟に余る建築を依頼されたという。その林昌二社長から、美術館の設計をバトンタッチされたのが、安田幸一所員だった。

ポーラとの関係は途切れることなく、お付き合いは続いています。建築や芸術、伝統技術の継承にも尽力する企業であることを改めて知りました。

大胆かつ繊細な建築をつくり続ける建築家との関係にも、驚きます。

■「私たちの家」に住む

自分の住まいを南の方に計画して、すでに設計を始めていらしたとか。それが一転、林昌二・林雅子両先生の自邸「私たちの家」（1981年発表）に縁があって入居された。このご英断には頭が下がります。お蔭で名住宅は残り、私たちには嬉しい贈り物となったのです。

が、名作と呼ばれる「私たちの家」、この住宅に



住むことは「文化財に住む感じ」の気苦労があるのではないかと……。

珊瑚礁とガラスの「南の安田邸」が、海辺に現れる日も待たれます。

■主張しない主張と引かない一線

33歳で任された「桜田門の交番」は、城壁に溶け込むような、自己主張しない建築をコンセプトに、既製品を使わず、ガラスと鉄骨で建てられた。自立たないとは、交番の通念を超えた発想。計画時には大反対されたという林先生に、竣工後「悪くないネ」と言わしめた。「パレスサイドの再来」と評論した構造家・佐々木睦朗先生も、よく覚えていると語られる。

プロダクトの勉強会を20年以上も続けている。どのような空間にも似合う、美しい神保電器のNKスイッチは好評です。最近発表した、収納付き椅子（e-chair）の発想源は「学生は金の卵だから」。モデルも学生さんたちで、大学の図書館で一企業のカタログを撮影した。独立独歩の東工大教授、ココに有り、というところです。

バーナード・チュミ事務所時代には、世界を廻って見たいものを見て、自分の中に貯めたといひます。篠原一男先生から得たものも忘れていないし、もちろん林先生の教えも。「きつめのジョークは、引き継がれていませんね」の覇志堂の一言には、笑って応えず。

立場が上司の頃、「辞めてからの準備に三つは得意なことを持て」とアドバイスしていた。今、指導者として、「皆が行っている方へ行くな。逆方向へ行ってみよう！ 何かが落っこっているはず！」と説く。